

ボンの留学

私が「留学に来てよかったなあ」と思えたことは、何よりドイツについて知り、世界をそして自分を広げられたことです。留学の良さの一つには、同じ国に長く滞在できるということがあると思います。日本で抱いてきたイメージと違うこともたくさんありますし、生活する中で旅行ではわからないその国の良さや習慣などを発見するのに十分な時間があります。長い間暮らすことで、ドイツについての関心も増していきました。到着したばかりの頃は、それまで旅していたほかのヨーロッパの街と違う部分が気になって、「ドイツって思ってたのと違うな」と残念に思っていました。しばらく生活してみるとはじめは気づかなかった問題の背景や、逆にドイツなりの良さに気づくことにもつながりました。

季節の移り変わりというのもドイツの文化をわかりやすく体験できました。私がボンに滞在していたのは9月から2月の冬季でした。秋にサマータイムが終了したあたりから急に日照時間が短く感じられ、紅葉が終わったころには寂しげな雰囲気がありました。記録的な暖冬だったので「シンと冷える」ドイツの本物の寒さは体験できなかったかもしれませんが、それでも11月末ごろに暖色のライトに照らされた華やかなクリスマスマーケットが現れると心が和んだのを覚えています。賑やかな人込みの中で大学の帰りに友達と温かいお酒を飲みに行ったり、クリスマスにしかない料理を食べたりしたのは本当に素敵な体験でした。1カ月つづいたクリスマスマーケットが終わって元の静けさが帰ってきたときに、「こんなに寂しいんだ」とわかり、あのクリスマスの明るさは、この寂しくて厳しい冬を越すためにあるのだな、と思いました。

また、ヨーロッパで生活をした体験は、多くの国と陸続きのヨーロッパで生活をするとはどういうことなのか実感することにつながりました。2015年の年末はフランスでテロやケルンで襲撃事件があるなど事件が続きました。難民問題も収束には至っておらず、ボンの近くのデュッセルドルフでも難民賛成派と反対派のデモがありました。すべての問題が日本にいたときよりも身近に感じ、新聞やニュース、ドイツでの反応に興味を持ちました。ボンの友人に、パリのテロの後に「空爆を強めるべきだ」と言われたときの衝撃は忘れられません。危機感が全然違う、ということを感じさせた瞬間でした。さまざまな場面でドイツと日本の違いを感じるがあると、日本はどうか、自分はどう思うのか、ということを実感し、自然に問いかけていて、今回の留学はドイツの発見と同時に日本あるいは自分の一面を発見するきっかけにもなりました。

ボンで留学していた半年間はたくさんの出会いのあったとても濃い期間でした。毎週末は決まって何かしらのパーティーに誘われ、ドイツスタイルの飲み会も習いました。小さな町でしたが、少し電車で行けばケルンやデュッセルドルフなど大きい街にも出られます。雰囲気はつくばに似ているような気がします。ボンで学生証をもらうときに半年で約240ユーロ(3万円前後)を支払うことになるのですが、その学生証でボン、ケルン、デュッセルドルフ、ドルトムントといった街を含む州全体を自由に行くことができるのもボンを選ぶ魅力です。もボン大学には日本学もあるので、日本に興味のある学生がたくさんおり、よく話しかけてくれました。またボンは留学生オフィスが手厚かったり、語学のコースがしっかりしている、困った時には筑波大学のオフィスに駆け込めるなど、サポートも充実しています。ボンでの期間は「1枚の写真は1000の言葉よりも多くを語る」という言葉を実感した半年でした。留学に遅い、早いはないと思います。決断には勇気がいりますが、行ってしまえば得るものは多いです。筑波大学のサポートを活用してドイツ留学行ってみたいはどうでしょう！